

5 花房の摘除、花上げの判断

株養成期間は、全ての花房を摘除する。葉面積の確保が不十分なまま花房を上げると、果実の肥大が悪くなるだけでなく、養分競合で芯止まりが発生し、秋に収量が低下しやすくなる。

花上げの時期は、すずあかねの直接定植では定植後 45～65 日頃（展開葉 6 枚程度）、ポット育苗では定植後に展開した大きい葉が 5 枚になる頃を目安に、充実した太い花房（大蕾）を残す。

やや早めで花を上げた場合は、摘花・摘果により着果負担を調整する（3～4 花残す）。

花上げが遅すぎると、着果負担がないので栄養生長にかたむき、次の蕾まで 60 日以上かかった事例もあるので、葉の充実度（大きさ、厚さ）も考慮して判断する。



3 葉での早すぎる花上げ



4 葉での花上げ

6 開花～果実肥大期の管理

収穫開始前で時間に余裕があるうちは、小花、不受精果など商品価値のないものは摘花・摘果し、着果負担を軽減する。着果数は、充実した花房で 5～6 果、細い花房で 2～3 果とする。

収穫中も、病果、奇形果や、収穫の終わった花房は速やかに摘みとる（摘葉より優先して行う）。特に、1 花房の花数が多すぎたり、草勢の弱い株は、早めに対応する。

肥料濃度が高すぎて、葉が大きく、葉色が濃い状態で相対湿度が下がると、葉先枯れ（チップバーン）が発生することがある。

すずあかねや赤い妖精では、草勢が強い状態で日照不足になると、「白ろう果」が発生しやすい。



チップバーン



白ろう果

頂花房の花数が多すぎると、成り疲れの後、次の葉芽が発生しない「芯止まり」となったり、出蕾が遅れ、収穫の谷間が長くなる。

1 花房の花数が多くなる要因として、花芽分化時の栄養条件が良すぎる（基肥が多すぎる・肥料の溶出が早すぎる）ことが考えられる。翌年の基肥の量、肥料の銘柄を検討する。



1 花房に 18 花 ムダ花が多い

7 摘葉

病虫害の付いた葉は摘葉し、防除を行う。ハダニは高い所に移動する習性があるため、古葉から新葉に移動させないことがポイント。冬越しした株では4～5月、春定植では6月頃が重点防除時期となる。『摘葉したら→ハダニ防除』

梅雨時は、摘葉のしすぎに注意するが、葉が混み合い過ぎると、湿度が高まり灰色かび病を発生しやすいので、適度に摘葉と定期防除を行う。

一度に多く摘葉しすぎると、光合成産物や吸水量が減少し、回復に時間がかかる。摘葉は、ハカマが褐変して緩んだ黄化葉や、縁枯れ、湾曲した葉、罹病葉、倒れて収穫の邪魔になる古葉を中心に行う。

8 ハウス周辺の整備環境

梅雨入り前に、ハウス回りの排水溝の手直しを行い、大雨の対策をしておく。

ハウス周辺で、アザミウマが寄生しやすいクローバーなどを開花させない。

雑草が大きくなってから除草すると、雑草に寄生していた害虫をいちごに追い込むので、早めに除草する。



9 定植2ヶ月後～収穫開始前の芽数の整理

すずあかねでは、主芽の他に腋芽、泥芽を2芽（合計3芽）に整理する。

芽の選び方

①一番太い主芽（出蕾開花、肥大中）

②③最も小さい2芽（不定根が出ているものを残す。大きい芽ばかりで揃えない）

収穫が始まったら すずあかねは弱小腋芽の摘除にとどめ、大きさの異なる芽（収穫中の芽、出蕾中の芽、葉が展開中の芽）が3芽（グループ）ある状態を維持する。

収穫中に弱小腋芽が株元に多く発生する場合は、3芽を残して整理する。

芯止まりの発生が多い場合、育苗中や生育初期の肥料不足や、収穫開始以降に腋芽を取り除き過ぎている可能性がある。

②、③の芽から始めに出蕾する細い花房は摘み取り、芽の養成をすると、9月以降に収穫する果実が大きくなりやすい。細い花房を8月に着果させてしまうと、高温で早期に着色して小果となる上、着果負担で草勢を落としやすい。

